

# 古代建築のイメージの限界

## ―描かれた古代建築の特質―

はじめに 古代建築の先行研究では、建物の構造や規模など物質的側面に主眼が置かれてきたため、建築が当時の人々にどのように認識されていたかという精神的側面には十分に光が当てられてこなかった。建物に対する認識の表出や表現としては、「文献資料にみえる記述」「小建築における表現」「絵画資料における描写」などがあり、なかでも絵画資料には、現存建築にはみられない建築の形が描かれている。例えば、中世以前の日本には数少ない二階建の建物（楼閣）である<sup>1)</sup>。もちろん、描かれる過程における抽象化・省略化の可能性の考慮は必要であるが、これらは現存しない建築の様式や細部の技法を示す稀有な資料である。また日本に限らず、中国の壁画古墳にも建築画がみられ、参考となる。

そこで本論では、日本の奈良時代の木簡「楼閣山水之図」や絵画史料、中国の隋・唐代の壁画古墳の建築画にみられる楼閣を中心に、古代に描かれた重層建築（塔を除く）の意匠を検討し、現存建築から導かれた古代建築のイメージの限界について言及したい。

**日本における楼閣建築の描写** 楼閣山水之図（平城京、740年頃、図46-①）は平城京二条大路北側の東西溝SD5300より出土した折敷の底板で、長さ61.3cm、幅10.8cm、厚さ0.8cmが現存する。建築群・築地塀・池・山が描かれ、特に楼閣を中心に、両脇に各2棟の建物や2棟の門の計7棟が描かれる。斜め上方から見下ろす描写は、同時代の正面から描く建物描写とは異なり、先進的である。

「楼閣山水之図」の建築的考察については、上野邦一氏や浅川滋男氏の論考に詳しい。描写された建築群について、上野氏は仏教・道教寺院、利休・補陀落仙などの可能性を提示しており<sup>2)</sup>、浅川氏は一步踏み込んで、花柄模様の築地塀から道教などの宗教建築ではなく、離宮か貴族の邸宅と推察している<sup>3)</sup>。また両氏ともに山や塀の描写から中国伝来の絵画を写したものと推察している。

この木簡には、楼閣以外にも、妻部分を強調した切妻造の単層門が楼閣の後方に描かれる。楼閣の屋根形状は、これとは異なる描写であり、寄棟造と判断される。また初層の頭貫とみられる横架材上に組物らしき表現が

みられる。楼閣の左下の建物をみると、やはり頭貫とみられる横架材の上に組物（平三斗カ）が描かれている。

なお重層・寄棟造の形式の建物は古代の現存建築にはないが、玉虫厨子須弥山図にも同形式の建物が3棟、確認できる。これらの楼閣も斜めから見下ろす描写で、寄棟造の表現が明確である。

東大寺山堺四至図（8世紀中期、正倉院蔵、図46-②）は東大寺領界を朱線で示した絵図で、大仏殿が描かれることが知られる。大仏殿は上層に登る「楼閣」とは趣を異にするが、数少ない奈良時代の重層建築の描写表現として触れておきたい。大仏殿の描写は正面図で、基壇付の二重、寄棟造で、初層・上層ともに手先の出る組物があり、上層には高欄が廻る。建物規模は上下層共に正面3間で、諸史料より知られる創建大仏殿の規模（桁行11間）とは異なり、デフォルメされた表現である。

法華堂根本曼荼羅（8世紀中期、ボストン美術館蔵、図46-③）は「楼閣山水之図」と同様に斜めから見下ろした構図で、後景には3棟の重層建築がゴコの字に配される。描写が小さく、不鮮明であるが、ともに桁行3間、梁行2間、二重で、中央の建物は鴟尾付の寄棟造、両脇のものは入母屋造で描かれる。中央及び右脇の建物の中央間には饅頭金物付の板扉が確認できる。いずれも二軒で、上層には高欄が廻り、組物は手先の出るようみえる。

東大寺大仏蓮弁毛彫（8世紀中期、東大寺、図46-④）は東大寺大仏の蓮華座の線刻で、重層建築が複数、確認できる。いずれも正面図である。図46-④の重層建築は下層正面3間、上層正面5間の寄棟造で大棟の両端に鴟尾を載せ、両脇に廻廊とみられる建物が続く、また二重に描かれるが、上層の柱が非常に短く、単層裳階付の可能性もある。上下層ともに二軒の表現があり、下層の組物には三斗らしき表現が確認できる。下層の垂木掛け付近には、一筋の横線があり、高欄の表現とみられる。

**中国における楼閣建築の描写** 隋・唐代の壁画墓のなかに、天象・四神などととともに、建築も描かれ、これに重層建築を含む。壁画墓の建築図については田中淡氏の論考があり<sup>4)</sup>、詳細はそちらに譲り、ここでは、楼閣や門楼などの重層建築に関する描写に限定し、その意匠的特徴に目を向けたい。

李壽墓第一過洞南壁、楼閣の図（630年、図46-⑤）はアーチの上に建つ二重、寄棟造（鴟尾付）の楼閣で、両脇に

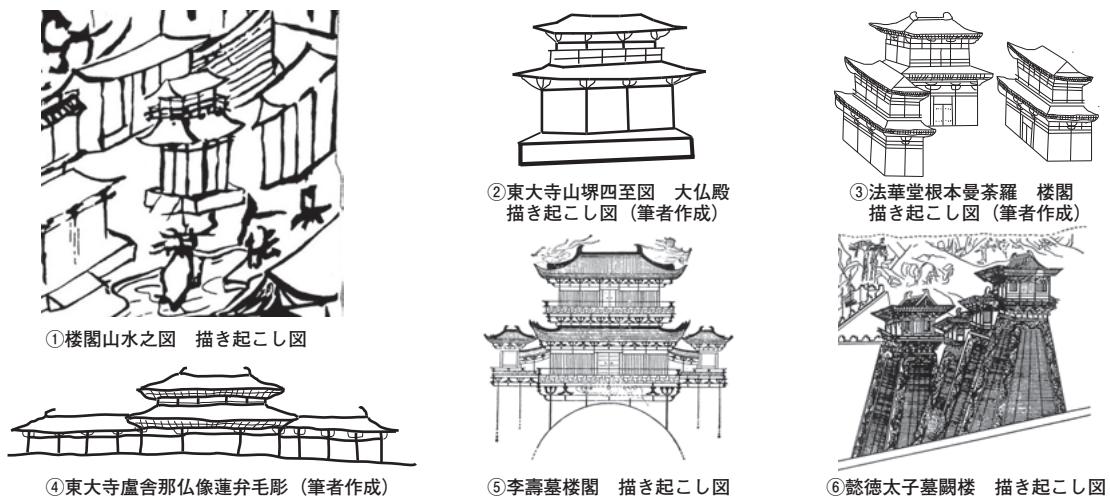


図46 描かれた古代の重層建築

軒廊が続き、正面1間の寄棟造（鴟尾付）の建物に至る。楼閣は上中層ともに正面5間で、中央間のみ板扉、両脇2間を連子窓とする。柱頭部を兩層闌額（二重の頭貫）で固め、その上に三斗、中備に人字拱を配し、二軒とする。ただし、隅部分では、兩層闌額の下方の横架材から組物の一手目が出ており、正確な組物形式は判然としない。腰組は二手先で、卍崩しの高欄が廻る。なお田中淡氏は、李壽墓にはこのほかに、鴟尾付の入母屋造の楼閣とみられる2棟の建物がみえるが、判然としないとする。

懿徳太子墓墓道東壁、闕楼の図（706年、図46-⑥）は城壁と磚積上に闕楼が配された図で、寄棟造（鴟尾付）の方3間で、周囲1間を吹放しとし、中央間を板扉、脇間を連子窓とする。腰組を備え、その上に高欄を廻らす。軒は二軒で、柱は兩層闌額で固められる。組物は二手先で、中備に人字拱を配す。

**建築画の描写表現の比較** 日中の重層建築の描写を提示したが、これらの表現方法を概観すると、正面図と斜めから見下ろす描写の2つの手法が確認できる。また中国の建築図は細部まで省略せずに描かれるのに対し、日本の描写はデフォルメが大きい。しかし、簡略化された描写は、建築の顕著な特徴を捉えており、当時の人々の建築に対する認識が表れていると考えられる。第一にいずれも高欄が描かれており、重層建築の主要な要素と認識されていたと判断される。また屋根の形状や組物の手先に関しては不鮮明ながらも描き分けがなされており、配慮が窺える。ただし後者は構造上、不自然であり、建築に対する理解が不十分な者の手による描写であろう。いっぽう、柱間装置に関しては、中国のものには連子や板扉の描写が明瞭に描かれるが、日本では明瞭に描かれておらず、重要視されなかったようである。もちろん建築画の史料の性格の違いを考慮する必要があるが、こうした描写の違いは、日中の建物に対する認識の差や描き手の違いを示しているのかもしれない。

**まとめ** 古代に描かれた重層建築の特徴として、寄棟造・高欄といった要素が抽出できる。特に寄棟造の楼閣は古代の現存遺構にはないが、こうした描写が一定数、確認できることから、さして特殊な形状ではなかったであろう。古代中国の宮殿の建物は、すべて鴟尾付の寄棟造とするという記述（『倭名類聚抄』の唐令の古記）にあるように、重層建築を含め、古代中国には寄棟造の建物は多かったとみられ、中国建築の意匠を求めた日本の宮城においても、寄棟造の楼閣が存在した可能性は十分であろう。

このように絵画資料にのみ確認できる建築形式は、現存する建築にもとづく古代建築のイメージの限界と、それに囚われた古代建築の理解の危険性を示している。すなわち、我々が「違和感」を感じることをもって、現存しない建築形式の可能性を排除してはならないのである。

同時に、絵画における建築の描写表現は、建築の細部意匠を知る有用な資料であることに加え、当時の人々の建物に対する認識・理解を示している。こうした視点は建物の抽象化や建築技術の伝播形態を考えるうえで重要な検討課題である。なお本研究はJSPS科研費26709044・26630288（ともに研究代表者海野聡）の助成の成果の一部である。

（海野 聡）

註

- 1) 古代日本の楼建築については、かつて拙稿で論じている（海野聡「「楼」建築の「見られる」「登れる」要素—奈良時代における重層建築に関する考察（その1）—」『日本建築学会計画系論文集』669、2011）。
- 2) 上野邦一「「楼閣山水之図」についての建築的所見」『年報1990』1990。
- 3) 浅川滋男「楼閣山水之図」『しにか』8、大修館書店、1990。
- 4) 田中淡「中国壁画墓の建築図と唐代初期の建築様式」『中国建築史の研究』弘文堂、1989。

図版出典：①『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告：長屋王邸・藤原麻呂邸の調査』図版編、Pl.220、奈良国立文化財研究所1995、④⑤：百橋明徳・中野徹編『世界美術大全集』第四巻、隋・唐編、83-84頁、小学館、1997。